

アナログ変調方式と振幅変調方式

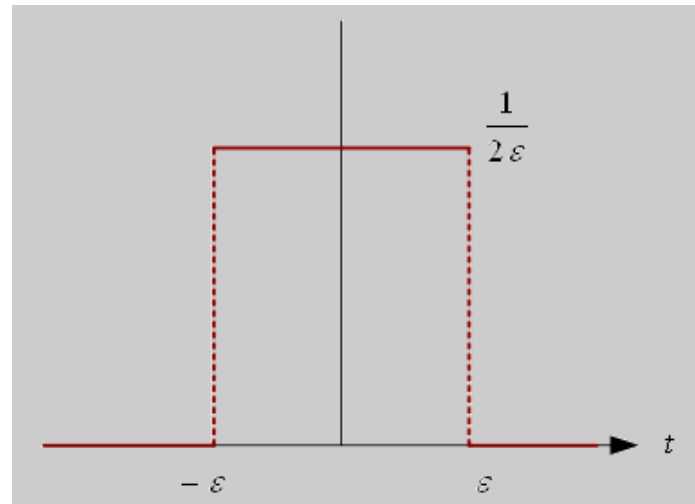
A1778594 池田 力

前回の宿題

δ 関数を用いて信号を取り出せることを証明する

$$\int_{-\infty}^{\infty} f(x) \delta(x - x_1) = f(x_1)$$

δ 関数を以下のグラフになるように定義する



https://www.mnc.toho-u.ac.jp/v-lab/yobology/delta_function/delta_function.htm より引用

前回の宿題

δ 関数のグラフから以下のように変形する

$$\int_{-\infty}^{\infty} f(x) \delta(x - x_1) dx = \lim_{\varepsilon \rightarrow 0} \frac{1}{2\varepsilon} \int_{x_1 - \varepsilon}^{x_1 + \varepsilon} f(x) dx$$

平均値の定理より $\int_{x_1 - \varepsilon}^{x_1 + \varepsilon} f(x) dx = 2\varepsilon f(\xi)$ なる $x_1 - \varepsilon < \xi < x_1 + \varepsilon$ が存在する

$\varepsilon \rightarrow 0$ のとき、 $\xi \rightarrow x_1$ となるから

$$\begin{aligned} \int_{-\infty}^{\infty} f(x) \delta(x - x_1) dx &= \lim_{\varepsilon \rightarrow 0} \frac{1}{2\varepsilon} \int_{x_1 - \varepsilon}^{x_1 + \varepsilon} f(x) dx \\ &= \lim_{\varepsilon \rightarrow 0} \frac{1}{2\varepsilon} 2\varepsilon f(\xi) = \lim_{\varepsilon \rightarrow 0} f(\xi) = f(x_1) \end{aligned}$$

参考文献: https://www.mnc.toho-u.ac.jp/v-lab/yobology/delta_function/delta_function.htm

アナログ変調方式

搬送波は一般的に以下のように表すことができる

$$s(t) = A \cos(2\pi f_c t + \phi)$$

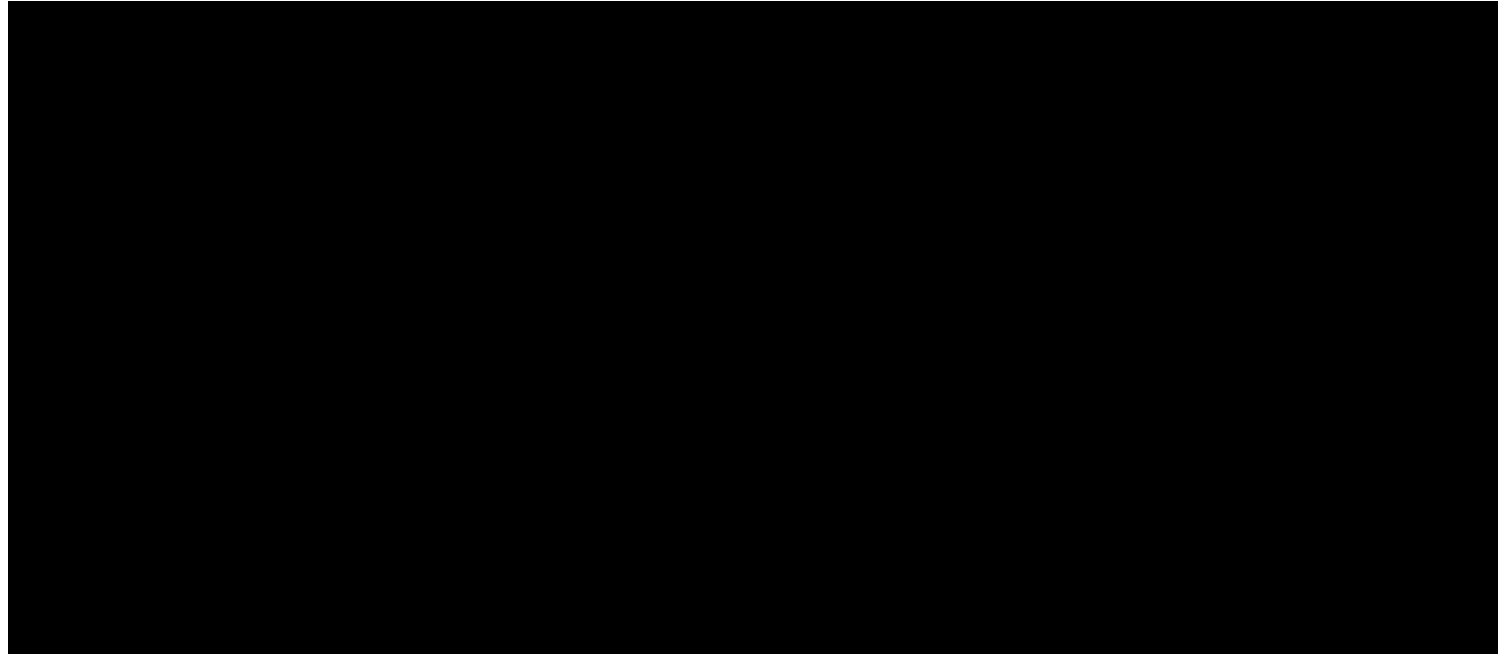
変調方式には搬送波のパラメータを変化させる方法により3種類ある

- **振幅変調方式** (Amplitude Modulation)
 - 振幅 A を変化させて情報を伝える
- **角度変調方式**
 - **周波数変調方式** (Frequency Modulation)
 - 周波数 f_c を変化させて情報を伝える
 - **位相変調方式** (Phase Modulation)
 - 位相 ϕ を変化させて情報を伝える

アナログ変調方式

信号は以下の手順で送信者から受信者へ伝わる

- 変調し送信される
- 伝送路を通る(ノイズが入る)
- アンテナで受信
- 復調し元の信号を取り出す



振幅変調方式

今回は振幅変調方式に限って、搬送波 $s_{AM}(t)$ の数式を導出する

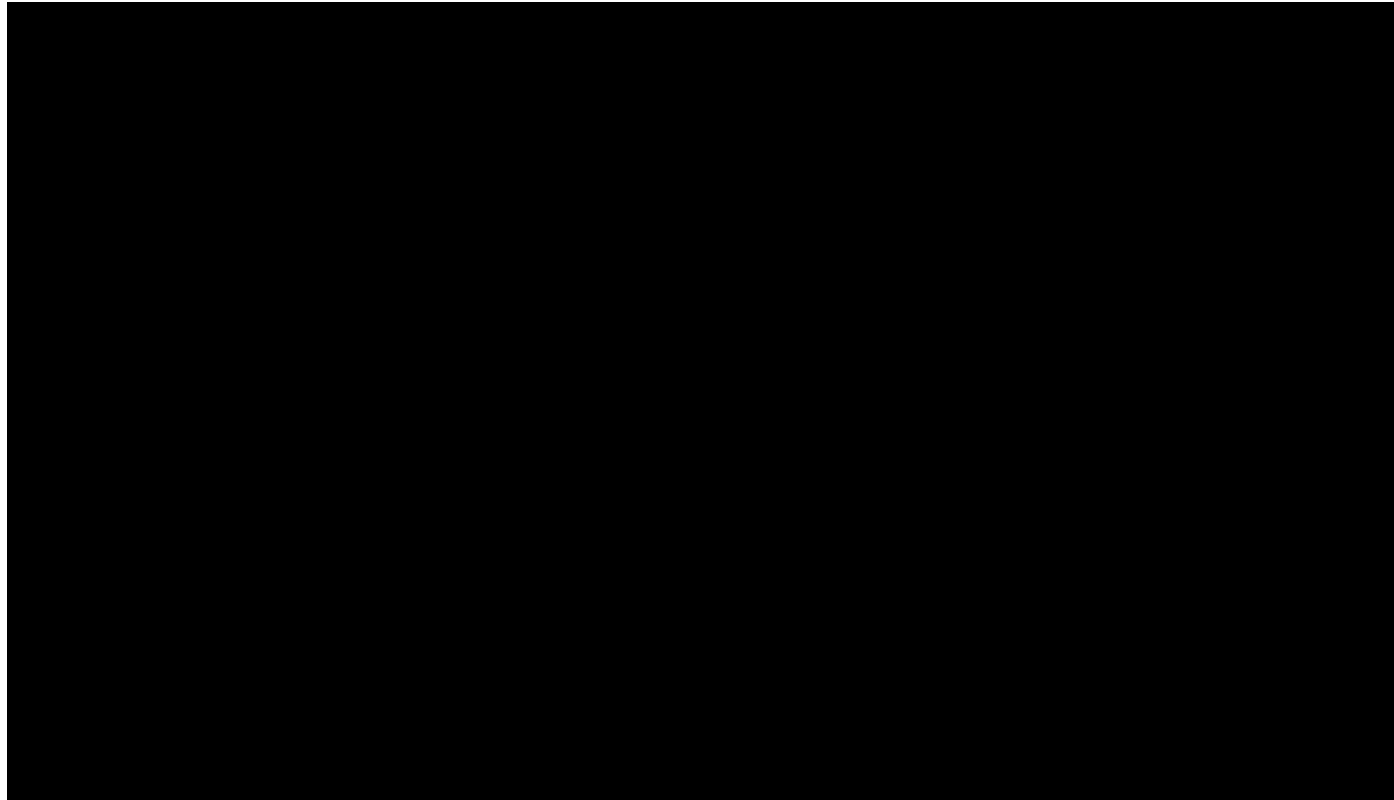
- 振幅変調方式は最も単純で古くから実用化されていた技術
- 変調信号(伝えたい信号) $v(t)$, 変調指数 k のとき、変調後の搬送波は以下となる

$$s_{AM}(t) = A_0 \{1 + kv(t)\} \cos(2\pi f_c t + \phi)$$

振幅変調方式

$k > 1$ の状態を過変調と呼ぶ

- 上の包絡線と下の包絡線が交差しており、信号処理がめんどくさくなる



- 信号処理を単純にするため、普通 $k < 1$ で設計する

振幅変調方式: スペクトル上の関係とベクトル図

変調後の搬送波を周波数成分に分解する

- 変調信号 $v(t) = \cos(2\pi f_m t + \theta)$ とする
- 搬送波 $s(t) = A \cos(2\pi f_c t)$ とする

$s_{AM}(t) = A_0 \{1 + kv(t)\} \cos(2\pi f_c t + \phi)$ に代入して、

$$s_{AM}(t) = A_0 \{1 + k \cos(2\pi f_m t + \theta)\} \cos 2\pi f_c t$$

$$= A_0 \cos 2\pi f_c t \cdots \text{元の搬送波成分}$$

$$+ \frac{A_0 k}{2} \cos \{2\pi(f_c + f_m)t + \theta\} \cdots \text{上側波帯}$$

$$+ \frac{A_0 k}{2} \cos \{2\pi(f_c - f_m)t + \theta\} \cdots \text{下側波帯}$$

振幅変調方式: スペクトル上の関係

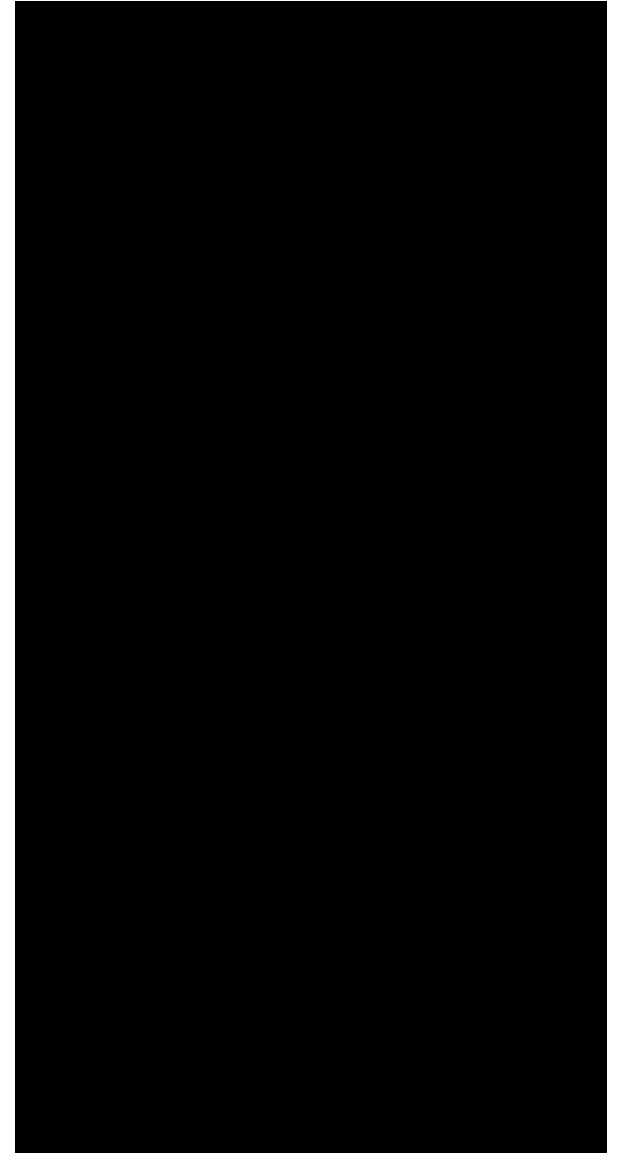
変調後の搬送波を周波数成分に分解する

- 変調信号 $v(t) = \cos(2\pi f_m t + \theta)$
- 搬送波 $s(t) = A \cos(2\pi f_c t)$
- 上側波帯 $\frac{A_0 k}{2} \cos \{2\pi(f_c + f_m)t + \theta\}$
- 下側波帯 $\frac{A_0 k}{2} \cos \{2\pi(f_c - f_m)t + \theta\}$

振幅変調方式: ベクトル図

ベクトル図を使って合成成分を図示する

- 搬送波: $\overrightarrow{OA} = A \cos(2\pi f_c t)$
- 上側波帯: $\overrightarrow{AC} = \frac{A_0 k}{2} \cos \{2\pi(f_c + f_m)t + \theta\}$
- 下側波帯: $\overrightarrow{AB} = \frac{A_0 k}{2} \cos \{2\pi(f_c - f_m)t + \theta\}$
- 図から、 $\overrightarrow{OD} = \overrightarrow{OA} + \overrightarrow{AC} + \overrightarrow{AB}$ であり、 D は F と E の間を直線上に移動するだけである。
 \Leftrightarrow 搬送波の周波数は変化しない



まとめ

- 変調後の搬送波は以下の式で表すことができる

$$s_{AM}(t) = A_0 \{1 + kv(t)\} \cos(2\pi f_c t + \phi)$$

- 変調後の搬送波は**3つの周波数成分の和**で表すことができる

$$A_0 \cos 2\pi f_c t + \frac{A_0 k}{2} \cos \{2\pi(f_c + f_m)t + \theta\} + \frac{A_0 k}{2} \cos \{2\pi(f_c - f_m)t + \theta\}$$

- 位相・周波数を固定したまま振幅を変化させることができる